カメラアングル CAMERA ANGLE

たくさんの人たちで大賑わい 総合体育館で農業まつり開催

11月28日、29日の２日間、例年好評の農業まつりが、今年は会場を総合体育館駐車場に移して行われました。

会場には町内外からたくさんの人が詰めかけ、長芋やゴボウなどの野菜、梨、豚肉、乳製品、花木など、町内産の品物が飛ぶように売れ、両手いっぱいに買い求めている人もいました。予想を超える売れ行きで、午前中で商品がなくなる店さえありました。

また、１日目にはつきたての餅、２日目にはあつあつの横越鍋が振舞われたほか、体育館内では農産物の品評会なども行われ、大変盛り上がった農業まつりとなりました。

自分で植えて、自分で収穫 オーナーが長芋掘りを体験

11月29日、ＡＦカガヤキが募集したオーナーによる長芋掘り体験が焼山の農園で行われ、家族連れなど約80名が参加しました。

それぞれのオーナーは、畑に割り当てられた自分の区画に種芋を５月に植え付けており、今回はその収穫。初めての参加者は農園の人の実演を見てから、最初は慣れない手つきで長芋を折ったりしていましたが、すぐにコツをつかんで上手に掘っていました。また、昨年も参加している人はすぐに作業に取りかかっていました。

８月の水害の影響で昨年と比べて小ぶりでしたが、参加者たちは、歓声をあげながら収穫していました。

飲酒運転追放と高齢者の交通事故防止 年末の交通事故防止運動実施

忘年会等による飲酒運転の増加、積雪等による交通事故多発が予測されるほか、高齢者の交通事故が頻発しているため、12月11日から31日まで、「年末の交通事故防止運動」が県下一斉に行われました。

12月14日には、交通安全協会や安全運転管理者協会、交通指導員などおよそ20名が町内の事業所と飲食店を訪問し、ポスターやチラシなどを配布。事業所・店ぐるみで飲酒運転追放に取り組まれるよう呼びかけました。17日には、交通安全母の会やライオンズクラブなど40名が参加して、役場前の県道で街頭指導を行い、通行する車に一台一台止まってもらい、交通事故防止を訴えました。

ふる里物語　町史編さんだより ㊿

沢海藩領に関する覚書

沢海藩初代藩主溝口善勝は、慶長六年（一六〇一）、父秀勝から五千石を分知（＝領地を分けること）され、同十四年（一六〇九）には、幕府から上野国甘楽郡馬山村（現群馬県下仁田町）・高瀬村（現群馬県富岡市）の二千石を与えられました。翌十五年（一六一〇）、秀勝が死去すると、改めて秀勝拝領高のうちから先の五千石と合わせて一万石、ほかに新田（＝新たに開発された田畑）分二千石を与えられ、上野国知行（＝支配領地のこと）分と合わせて一万四千石を領する大名となり、ここに沢海藩が誕生しました。

寛永十一年（一六三四）に善勝が死去すると、その遺領は、長男の政勝が一万石を相続して第二代藩主となったほか、三千石は次男の助勝、千石は三男の安勝に分知されました。同十三年（一六三六）に助勝が急逝すると、幕府は、遺領三千石を一時兄政勝に預けましたが、同十九年（一六四二）、四男信勝に二千石を与え、残りを没収しています。

善勝が秀勝から直接分知された一万二千石（うち二千石は越米（＝実際に支配する村高が不足の場合に不足分を補った石高のこと）で給された）について、領地村名を書き上げた史料は未発見です。

そこで政勝・安勝・信勝に分知された領地、及び元助勝領で幕府に没収された領地とを探ることでそれを類推してみることにしましょう。

まず、政勝領一万石については、上野国分二千石と越米で給された二千石とを含むため、越後国分領地は当初六千石でした。

しかし、寛永十六年（一六三九）、新発田藩から沢海・和田・舞潟・茅（野）山・尻上（現五泉市）の五か村（今までの越米分二千石）を譲り請け八千石となり、このほかに、満願寺・木津・江口・小杉・新飯田（現白根市）・割野・嘉瀬・酒屋・平賀・保内（現三条市）・橋田・四ッ屋・小熊（以上、三か村は現五泉市）・旭（現新津市朝日）の十九か村が、寛文四年（一六六四）「寛文印知集」に記載されています。

次に、安勝領については、「城内旧記抜書」（新発田図書館所蔵）の記載により、現水原町の山口村（七百石）と下条村の内（三百石）であったことが分かります。

元助勝領で幕府に没収された領地は、現白根市の茨曽根・萱場村であったことがすでに解明されています。（南憲一「沢海藩の政治」）

では、信勝領二千石はどこにあったのでしょうか。その手掛かりとなる史料が「案紙帳」（＝江戸時代初期の新発田藩における藩政上の重要事項に関する指示・情報文書を収めたもの）で、例えば、慶安三年（一六五〇）の記載に「九十郎様・源右衛門様御知行下条村」が見えます。九十郎は安勝、源右衛門は信勝のことですから、下条村の一部が信勝領であったことが分かります。そして、正保二年（一六四五）、「高田江被遣候当御領御絵図控」（新発田図書館所蔵）には、下条村の部分に「六七八石三斗七升三合　二千石之内　溝口源右衛門」、保内村の部分に「一三二一石六斗二升一合　溝口源右衛門」と記載されています。すなわち、相給（＝一村が複数の領主によって分割知行されること）の形で下条村（現水原町）と保内村（現三条市）の一部が分知されていたのです。保内村は、政勝領の下保内村と、信勝領の上保内村とに分知されたのです。

（近世部会　後藤一雄）

正保4年（1647）御領分絵図（新発田市立図館所蔵）に見える横越町内の地名

短歌（公募作品）

温泉に友に誘われ一日は刻の過ぎるを忘れて語る　小田トキイ

華やかに銀杏散りたる並木路外とうの灯寂しみて居り　中村チョイ

耳に手を当てて話を聞き返す老人達の笑い別れる　加藤正喜

雲垂る空に舞ひ立つ白鷺の白き翅に稲妻光る　佐藤々泉

突然の雪降りし朝サルビアはまだ赤き花もやしておりぬ　藤田千代美

晴の間に落葉集めて焚火する亡夫の追憶煙のなかに　渋谷ウタ

お互に八十路越えれば痛みあり年賀欠礼友の文読む　伊藤吉作

カタコトと磐越線をゆられつつ紅葉もとめに友と二人で　田辺タケノ

雪吊りの老松眺む露天風呂風情を友と語りておりぬ　清田ミイ

大根が百八十円と主婦達の話し聞きつつラーメン買いり　高橋一夫